

時 間

■学生生活もあと一年となった今、時間を本当に大切にしたいと感じる。時間を大切にすることは、決して一秒一秒を無駄なく過ごすということではない。以前までは時間を大切にすれば、そういうことだと考えていた。だが、そんなことは到底不可能である。過去を振り返れば、無駄な試みは無数にある。思えば大学入学当時は、公認会計士を目指し簿記の勉強に明けくれていた。だが結局、将来を考えこんな事ばかりやっているとつまらないと投げ出した。検定も受けずにいたため資格でもないし、今ではすっかり忘れてしまったので今後活かすことも出来そうも無い。今となっては、あれは無駄であった。だがあの時自分の将来を思い、軌道修正できたことを考えれば決して無駄とは言い切れない。そう考えれば、当時の私は無駄な時間を過ごしていたようで、意味のある時間を過ごしたのだろう。

無駄な時間を過ごすとは何もしないことである。来年から社会に出て行くことを考えると、今の有り余った時間は非常に貴重である。社会に出れば仕事に追われ、私が今持つ時間的余裕はなくなるだろう。これからは、無駄かもしれない時間を過ごす余裕など無い。社会に出たら問われるのは、いかに無駄なく時間を活用できるかである。誰にでも平等に分け与えられた時間を有効に使い、仕事に活かす力が問われ差別化がはかれていくだろう。だから今は、無駄かも知れない挑戦をしておく絶好の機会である。ただただ時間を浪費することなく、学生らしく時間を無駄にしながらも日々過ごしていきたい。

さて、時の流れはどうしてその時々によって違って感じられるのだろうか。最近では、もう6月かと時の速さに驚かされる。有り余っていた時間が底をつこうとしている。社会に出た時の、時の流れはどのように感じられるのだろうか。定年まで勤めるとすればおよそ40年間。今までの人生の二倍の時を過ごしていくわけである。日々仕事に追われ過ぎ去ってしまうのだろうか。そんな人生ってどうなのだろう。仕事に熱中し取り組むこと事態が無駄だとは思わない。仕事を通じて社会貢献が出来れば、大変さに比例して非常に有益なものが得られるだろう。だが、これはあくまで今の見解であり社会人になってみれば変わってくるのかもしれない。日々時間に終わられる生活に、ただただ疲れ果て、仕事にやりがいを感じるどころではなくなってしまうのだろうか。そうなりたくは考えたところで、今はそんなことを深く考えても仕方がない。残った時間を楽しむ。それだけだ。

リアルということ

■Real=現実と捉えるとするならば、反意語は「虚構」や「理想」である。

私たちは、年を重ねるにつれ、「現実」ということを意識するようになる。また、そのように考えることが「大人」になる一種の条件のように思える。小さい頃は、「パイロットになりたい」とか「ケーキ屋さんになりたい」といった夢があったに違いない。当時、夢は一つではなかったし、その夢を実現できる可能性などというものは全く考慮せず、素直に夢を語っていた。しかし、目の前に横たわる「現実」を目の当たりにし、人は変わっていく。

“Real” をめぐって

自らの思考・行動に「現実」という要素を組み込むことで、確かに、思考・行動が説得力のあるものになる。つまり、「大人っぽく」なるのである。中学・高校などの思春期の若者は「大人っぽく」なろうと試行錯誤する。そうした試行錯誤を繰り返し、大人になったとき、人は成長しただけであろうか。さまざまな人生経験により、人としての「厚み」はましただろう。しかし、「理想」や「夢」を気づかないうちに失っている。というより、限界を作ってしまう、多くの可能性を切り捨てていつているのだろう。現実的に考えるということは、一種の不可能性を含んでいる。自分の中で「不可能」・「無理」だと思ふことは、自然に限界を決めていることであり、自らの可能性を狭めることを意味する。

私たちは、年を重ねるにつれ、「現実的に・・・」ということが口癖のようになる。それと同時に「無理」ということを多くの場面で使うようになってくる。大人になるということは、下の世代からの憧れの対象とされる。しかし、大人の大部分があらゆるチャンスの中から、不可能だと思ふことを切り捨て、自分にできそうなことを選択し、生きている。「理想的には・・・」という、「現実的には・・・」という言葉で否定されるかもしれない。しかし、「理想」というのは望ましい状態であり、誰もが理想的な状態にあるほうがいいと思っているはずである。それを現実的に不可能とって理想を潰してしまうのは、現実世界の変革を諦めているにほかならない。

私たちは、いつまでも「夢」や「理想」を語って生きることはできないのかもしれない。かならず現実という壁に立ち向かわなければならない。そのとき、大きな壁を前にして「無理」といつて逃げるのは簡単である。大切なのは、「夢」や「理想」を持ち続け、それを実現するために努力することである。「千里の道も一歩から」というように、「理想」や「夢」の実現にも、最初の一歩が必要である。年をとっても現実世界に甘んじるのではなく、「理想」や「夢」を忘れないように生きていきたい。

■「リアルということ」と聞いて、まず思い浮かべたのは、「我思うゆえに我あり」ということばです。確か、デカルトという哲学者のことばだったと思います。学問もこの世の中の存在も、確かなものではありません。悪魔が「私」をだまして、あたかも学問が正しいように、世の中が存在しているように錯覚させている。しかし、「私」という存在は「考える」という行為がある限り、「私」の存在の証明になるというものです。

最近、私は、「本当の自分探し」というものをしています。「探し」というか、「戻し」と言った方が適切かもしれませんが。とりあえず、まずは髪の毛を切ってみました。大学に入ってからずっと伸ばしていたのですが、一ヶ月ほど前に急に思い立って切ってしまいました。長い髪は、女の子らしく見えたかもしれませんが、髪を乾かすのがめんどくさいという「リアル」がついに勝ってしまいました。そのついでといつては何ですが、洋服もカジュアルダウンしています。流行の洋服を着るのではなく、この先、2、3年、それ以上着られるようなベーシックなデザインを好むようになりました。今までは、5cm以上のハイヒールしか履かないようにしていたのですが、スニーカーを履くようになりました。(高校生のときに元・

“Real” をめぐって

法政大学教授の田嶋陽子さんの文章を読んだのですが、そこには、女性はハイヒールを履くことによって、「自由」を奪われているとありました。フェミニストらしい意見かもしれませんが、今になっても覚えているということは、何か説得性のある言葉だったのだらうと思います。) そのおかげで、以前よりもフィジカル面はもとより、メンタル面も楽になった気がします。

ゼミ活動においてもその傾向が強くなっています。今までは、こういう課題が出ると、知的なお堅い文章を書こうとしていました。しかし、今回はそれはやめてみました(ゼミの課題のエッセイを、です・ます調で書くのは初めてです)。グループ活動等においては、先輩として、きちんとリーダーシップを発揮しなければとあせっていた時期もありましたが、一歩あゆみを止めて、一息おいてみると、案外うまくいくことがわかりました。「型にはまらない」という型にはまることによって、私はずいぶん楽になりました。

これから、就職活動が始まります。以前は、漠然とではあるのですが、大手企業に勤めて、高給取りにならなければならないと思っていました。人に知られている企業ではないと、格好悪い気がしたのです。それに、自分は物欲が人一倍あると思っていたので、消費できない生活には耐えられないのではないだろうかという心配もありました(ただ、今もお買い物は大好きです。)

背伸びをすることは大切です。だけれども、「リアル」を見失うほどに上に行こうとすること(例えるのなら、ぐらついた台に乗ること)は、「リアルということ」とは程遠いのではないのでしょうか。今回は、「私」の在り方を中心において書いてきましたが、「リアルということ」というのはつまり、「等身大」ということではないのでしょうか。

■リアルについてエッセイを書くにあたって昨日、テレビで『子供の携帯事情』というニュースを見て、驚愕したことを伝えたいと思う。この特集で、小6で17万円もの携帯代を請求される現実、それをずっと知らずにいた親の驚き、親の知らない世界に『携帯電話』を媒体とした『子供のリアル』が存在することを知ることとなった。毎日学校で顔を合わす友人とも最低1回はメールをすることや、例えば3分以内に返信をしないと仲間はずれにされてしまうこともあるという。僕らの頃では考えられなかったこの携帯電話に依存した現状も、当事者である子供たちからすると唯一の世界であり、間違いなくリアルなのである。そこには直接のコミュニケーションはないだろうが、彼らは文字だけの会話を極めて重要な位置に置いているのがとても悲しく感じた。

このことで感じたのはリアルとは、なにか。ここからはやや横暴な意見になってしまうが、私は、リアルはあるべき姿であってほしいと考える。単純にそのままであるのが意味的にも当然なのだが、こう思ってしまう自分がいるのも事実である。理想が強すぎるのでこれ以上は書かないでおく。で、まあ結局としては『リアルを疑う眼』を養うことが重要だということに行き着いてしまった。いまどきの小学生に真のコミュニケーションを説くことは無理だろう、言ってしまうと大人であっても真に理解はしていないだろうから。しかし私たちは小

“Real” をめぐって

学生の携帯事情に違和感を持つのだから『他人にとってのリアル』は疑うことはできるのだ。それを自分に向けること、それはとても難しいけれど、ウソに塗り固められた現代でリアルを疑うことをやめた時、人生は実に無意味なものになってしまいそうで、私はそれがとても恐い。自分の信じること、常識とするものが必ず正解だとは思わない。常に真実とは何かを考えていきたい。…とまあありきたりな締め言葉になってしまったが、それが私のリアルなのだろうか。(笑)

* * *